

# サッカーパークの運営と 市民スポーツの環境

神林 飛雄史

(社)横浜サッカー協会理事

**ワ**ールドカップが終わり1年以上がすぎた。あのワールドカップは何を残して行ったのか？

みなとみらい地区に残されたサッカー・パークの運営と市民スポーツの環境を通して考察してみたい。私は2002 World Cup Korea/JapanにJAWOCの1員として(社)横浜サッカー協会の推薦をうけて参加しFIFAのAssistant to General Coordinatorとして活動をした。この間のべ2年半、大会の競技運営面を中心に準備に奔走した。現在「横浜みなとみらい市民サッカー・パーク」を「ワールドカップ市民の会」から引き継いで(財)横浜市民スポー



ふれあいサッカープロジェクトのゲストコーチを勤める井原正巳さん

**①**にぎわうサッカーパークのサッカー・パークは、2002 World Cup Korea/Japanのプレ・イベント用に作られたもので大会前にはワールドカップ・トロフィーアーの開幕式など数多くの国際的イベントに使われてきた。設備は、最新式の人工芝でサッカーの固定スパイクが使える。縦105m、横65mのコートがとれ、ピッチ上ではサッカーをはじめホッケー、ラクロス、ラグビー、アメリカン・フットボールなどが利用可能である。そして雨天でも利用が可能であり悪天候の利用中止により公式戦のスケジュールが大幅に狂う率が極めて低い。また現在の学校の校庭では満たされない利用目的にあった環境設置

をすることができ授業などもおこなえる。また多くのセレモニーを行うことが可能であり多くの市民利用が期待できる。2002年2月の設立・スタートから10ヶ月は「ワールドカップ市民の会」が中心となり主にワールド・カップイベントを行った。2003年1月からは前出の(財)スポーツ振興事業団から業務委託を受けた(社)横浜サッカー協会がプロのトップ・チームから小学生まで多くの要望にこたえるべく日夜運営業務に励んでいる。

業務内容としては、現在5名の協会スタッフと9名のアルバイトが2人1組で管理運営業務を行い平日は、朝10:00～夜12:00・土日・祝日は、朝8:00～夜12:00まで営業しており、雨でも利用可能である。朝の清掃から始まりピラス(ゼッケン)の洗濯、電話オペレーション、グラウンド・レイアウト、などをおこなう。

来場するお客様は多種・多様で次のとおり。

- 社会人・シニア** は横浜FCのトップ・チームから社会人の11人制・8人制・5人制の各カテゴリーの団体。
- 学生** は神奈川大学連盟リーグ(公式戦)、神奈川大学サッカー部練習、横浜国大サッカー部練習、国体神奈川少年サッカー選抜練習会、FMリノス・ユース練習・ふれあいサッカープロジェクト、横浜FCユース練習、市中体連総合体育大会サッカー専門部門(公式戦・準決勝)、神奈川県サッカー協会(クラブ・ユースU-15決勝・クラブ・ユースリーグ・キッズ・サッカースクール)、市内中学校等練習。幼稚園大会。
- 女子** は横浜市少女サッカー・トーナメント。
- 授業の一環** として横浜商科大学ゼミナール研修(鈴木ゼミ)、クラブ国際高校(体育)。
- 公共体イベント** としてワールドカップ1周年記念18区対抗少年フットサル(横浜市教育委員会)、スポレク(横浜市スポーツ振興事業団)。
- 社会福祉事業** として横浜市福祉局知的障害者選抜練習。
- 国際交流事業** として日米親善カリフォルニア大学選抜・シーストU-23対神奈川大学、日韓親善高麗



ジュニアユースと社会人チームの親睦試合

## ②求められる市民スポーツの環境整備

のサッカー・パークのスポーツビジネス・コンセプトは基本的に今までの学校開放や公園利用とは異なる。もともとスポーツ・ビジネスというものが日常の中にはあまり存在してはいなかった。せいぜい審判代、コーチの謝礼、スタジアム利用料、役員弁当代、交通費等、あくまで人的な費用であり、支払ってしまえば終わりというものがほとんどで設備利用料もできるだけに、足りないものは自分たちで補充していくというものが多かった。

また年に1回や2回の公共公園の抽選会に多くの父母が殺到して結果的には多数決の論理で1チームから抽選をすれば大きなクラブはいつまでもグラウンドを確保できるが小さいクラブはいつまでたってもグラウンドすら確保できない。学校開放にいたってはみにくいチーム代表者間の争いが始まるのである。ある時自分の住んでいる地元の小学校の校庭に行ってみると大人のサッカー・チームが開始時間を待っている子供の前で狭いスペースで思い切りボールを蹴っていた。

この時代になってなぜ大人は大人の手で新しいスポーツ・ファシリテイを作れないのだろうか。小学校は

小学生のために設計された学習設備であって決しておとなのための設備ではない。欧米には数多くの社会的な大人から子供まで共有できるスポーツ・ファシリテイ(SOCIAL SPORTS CLUB)が存在する。このようなスポーツクラブはあらゆる世代のスポーツを通して行われる社会教育の一端になっている。横浜では135年前前にできた山手の外国人スポーツクラブ・Y.C.&A.C.がSOCIAL SPORTS CLUBである。

子供のサイズの設備に大人が入ると窮屈だが大人のサイズに子供が入って大きいのなら分割利用すればよい。またFIFAサッカー場の建設基準は、芝生エリア(フィールド全体)は120m×80mで国際試合用のプレイング・フィールドサイズは、105m×68mである。(現在ではFIFAは新型人工芝を公認している。)もし120m×80mの新型人工芝のフィールドがあったならばサッカーのみならずアメリカン・フットボール、ラグビー、ホッケー、ラクロス、など数多くのスポーツのプレイング・フィールドが共有できる。また指導計画も大会運営計画も現在の市内グラウンドの抽選による確保によって決定するので不安定である。また雨天時にはすぐ利用禁止になってしまうのでスケジュールすら



知的障害者とのサッカー交流

い。別に贅沢なシャワーを望んでいるのではなく「物を設置するのなら必要数はいくつか？」ということである。トイレも仮設である。更衣室も一度の利用で10人もはいれば超満員である。冷房もなく扇風機(温風器?)で生ぬるい風が吹いてくるだけである。ミーティング室も無いため暑い夏はわずかなテントの日陰を確保してミーティングするために利用者の間でスペースの奪い合いである。

将来このようなスポーツ・ファシリテイが市民のために根付くとすればあきらかにコンフォタブルな設備が必要になり「いつ、どこで、だが、なにを、なぜ、どのように」というTPOに応じたものが設置されなければならないであろう。ただ大きいものがよいわけではなく、ただ金をかければよいわけでもない。身の丈にあったものを作りみんなが使いこなす必要があるであろう。そして健全なお金(利用料)が税として地域に投下され公共事業として市民に還元されなければならないであろう。いままでの公園の芝生グラウンド利用料や学校開放利用料ではとても改善や芝生の養生費さえ生まれえない。将来のために大きな視野を持ち建築物というハードだけではなく指導者の育成や試合・スクールの運営

などのソフト・ウェアも研究して将来の地域の資産にしていかなければならないと思う。これは利用者や市民の責任でもある。

時代は大きく変化しており個人も自己変革が必要とされている。スポーツをとりまく環境も変わってきており、昔はスポーツはあくまで体育であり根底に軍事教練の延長というものがああり、戦後復興期のオリンピックのメダル至上主義というものがあつたが、これからのスポーツのベイスは、参加する人がみんな楽しめるコミュニケーション・スポーツでなければならない。その中から優秀な選手が輩出されるのである。選手もコーチも裏方も観客も父兄も…そしてあらゆる市民がスポーツを通して多くの人と知り合い、多くのものを学習して楽しい余暇を過ごせるようにならなければならない。決して金メダルを取るためだけでなく、ただ汗をかいたためだけでなく、経験から人間性を高めて意義のある人生を送れるように導いていかなければならない。それを指導できる指導者の養成とそのためのベイスになる設備(サッカー・パーク)がそのサンプルとなりうるようにしたいと考えるのである。